8　アンケート調査結果の総括

【回答者の属性】

○　回答者の性比と年齢階級を母集団と比較した場合、回答者は女性が多く、50 歳以上の各階級で回答者の比率が高く、39 歳以下は 14.1%であり、母集団の比率 26.3%に対し低いことに注意が必要である。また回答者には居住年数の長い方が多いことも特徴である。

○　市民の意識として、高砂市が文化的であると感じる回答者は 20%であり、感じないとする回答者は50%である。なお高砂市文化連盟加盟など、文化団体に加入している割合は 10%未満である。

○　高砂市で自慢をしたい文化や人物、ものでは、「石の宝殿/生石神社」「秋祭り/祭り」「高御位山」「万灯祭」が上位を占めており、これは平成 27 年度の調査とも共通する。

【文化芸術の鑑賞と活動】

○　日常生活の中で優れた文化や芸術を鑑賞することについての重要度は、70.4%が「重要」または「どちらかといえば重要」と肯定的に回答している。また高砂市が文化的なまちと感じる意識が高い程、芸術文化の鑑賞を重視する傾向がある。

○　新型コロナウィルス感染症の拡大のため、行動の自粛やイベント開催の中止が令和 2 年度、3 年度と 2 年間続いたため、過去 3 年間に遡っての文化芸術活動に関する問となっている。まず、直接鑑賞した文化芸術（複数回答）では、「鑑賞したものはない」が 29.5%を占めた（平成 27 年度は 31.6%）。鑑賞した文化芸術で最も多い回答は、「映画」で回答数の 24.1%を占めた。鑑賞した文化芸術がある回答者数を分母する比率では 67.6%となる（鑑賞したものがある方の 67.6%は「映画」を鑑賞した）。「美術（絵画、陶芸等）」がそれぞれ 16.6%、46.5%、「音楽」が 15.8%、44.4%、「歴史的建造物・埋蔵文化」が 15.3%、42.9%である。なお、平成 27 年度と令和 3 年度で、上位にある文化芸術の内容に大きな違いはない。

○　年齢との関係では、「鑑賞したものはない」との回答は年齢が高くなるにつれて上昇する。また鑑賞した文化芸術では、動きのある文化芸術は若年者層ほど、逆に絵画など静的な対象を鑑賞することは年齢層の高い方で比率が高くなる。

○　「鑑賞した文化芸術はない」との回答者で、日常生活で文化芸術を鑑賞することを重要視する考えは低い。また、娯楽の要素が強い「映画」「演芸（落語、漫才等）」「歴史的建造物・埋蔵文化」「音楽」については、文化芸術を鑑賞することを重要視しない回答者での比率が高い。

○　鑑賞したものがない理由（複数回答）で最も多いのは、「新型コロナ感染拡大で外出を控えた」で 26.0%、回答者の 53.0%となった。次いで、「時間的余裕がない」が 14.5%であった。また「鑑賞をしたい内容がない」は 11.5%、「文化芸術に興味がない」は 11.1%と文化芸術を重視しないことは 2 割を超える。「十分な情報が無い」9.8%、「入館料や入場料が高い」5.5%、「会場が遠い、交通の便が悪い」5.1%は文化芸術へのアクセスの課題である。

○　鑑賞した場所では、「高砂市内のみ」「高砂市内のほうが多い」が 10.0%であり、9 割は「高砂市外」「高砂市外が多い」となった。高砂市内での文化芸術の鑑賞が困難であることを示している。この点は平成 27 年度調査とほぼ変化がない。

○　今後直接鑑賞をしたい文化芸術（複数回答）では、「音楽」が最も多く 18.1%、「映画」17.0%、「美術（絵画、陶芸等）」13.3%、「歴史的建造物・埋蔵文化」11.6%であり、上位は「過去３年間で実際に鑑賞をした」との回答の多かった文化芸術である。

○　過去 3 年間で直接鑑賞した文化芸術の平均数は 2.8 件、今後、直接鑑賞したい文化芸術の平均数は 3.6 件であり、市民は文化芸術の鑑賞に「飢えている」。年齢階級別では、「30～39 歳」以上では、今後の平均鑑賞数が、過去のそれを大きく上回るが、「18～29 歳」は 2.5 件から 2.8 件へと増加幅は小さく、若年者は今後、直接出向いて文化芸術を鑑賞することに関心が薄い。オンライン配信の充実も背景にある。

○　自分自身での文化活動や支援をする活動について、「重要」は 12.1%、「どちらかといえば重要」は 41.0%で過半数を占める。自ら行う文化活動、その支援を重視する市民は多いといえる。高砂市が文化的なまちと感じる方は、自分自身での文化活動などを重要と考えている。

○　日常生活の中で優れた文化や芸術を鑑賞することと、自分自身での文化活動や支援する活動の重要性の認識は比例的な関係がある。自ら文化芸術活動を担い、文化芸術活動を支援するためには鑑賞の機会の拡大が必要であることを示唆する。

○　自分自身での文化活動や支援する活動の内容（複数回答）では「特に関わったことはない」は 74.9%で市民の多くは、鑑賞以外で文化芸術活動に関わることが少ないと思われる。

○　活動をしている回答数を分母に、活動別では「演奏、出演やその支援」が 22.6%、「美術・書道・文学等の創作」が 17.0%、「美術や茶道等の習い事」が 15.1%である。また文化芸術活動の支援にあたっている回答者の比率は 32.0%である。

○　関わったことのない理由では、「時間的余裕がない」が 19.7%、「鑑賞以外するつもりはない」が 14.5%、「十分な情報が無い」14.1%、「新型コロナ感染拡大で参加を控えた」が 13.1%である。一方、文化芸術活動に関わるきっかけとなった理由では「知人、友人に誘われて」が 34.8%であることから、市民が自ら文化芸術活動に関わるためには、活動の情報を広く提供し、活動する仲間を紹介することなどが重要と思われる。

○　文化芸術の鑑賞や活動についての自由記述意見では、82 件中、20 件が、文化芸術に触れることの重要性や期待を示しており、「幼いうちから芸術、伝統文化にふれることは人間形成にとって重要」「伝統文化にふれることや継承することは重要」との意見があった。一方、「高砂には美術館もなく、高砂市文化会館も古い」「高砂市は文化活動や活動できる場所が少ない」など、施設の不足や文化芸術活動の一層の誘致が必要との意見も 29 件あった。

【「高砂市文化振興条例」と「高砂市文化振興基本方針」について】

○　『高砂市文化振興基本条例』を「全く知らない」の比率は 79.4%である。平成 27 年度では 75.9%であったため、条例制定 10 年目を迎えても、市民の認知度は低い。

○　条例制定後に市内での文化芸術活動に変化があったかとの問い（複数回答）にも「活発化したとは思わない」が 63.6%を占めている。主体的な立場での文化芸術活動が増えたとの回答はほとんどない。背景には新型コロナウィルス感染症の拡大による活動自粛や人の集まる場所へ出控える行動変容もある。なお平成 27 年度との比較では、市の事業については拡充をしていると市民は評価をしている。

○　「高砂市文化振興基本方針」の 5 つの基本施策のうち、最重視されるのは「文化による産業振興や地域の活性化」が 31.1%、「文化を担う人材の育成、活用」28.6%、「多様な文化交流の促進」17.2%、「文化を基盤に市民、団体等、市との連携」15.0%、「文化資源の発掘、保存、活用」8.2%である。文化を活かしての活性化、人材の育成、組織的な対応の順で重要性が指摘される。

○　高砂市の文化振興事業で知られているものを選択肢から複数回答で挙げると、「すべて知らない」が 38.1%も占め、居住年数が長い程、その比率は低下する。知っているもののある回答で、「高砂市美術展」は 15.9%、「まち歩き事業」は 15.5%、「文化まつり事業」は 13.9%であり、回答の多い上位は、「鑑賞」や気軽に参加する文化芸術事業であり、次いで学習活動の比率が高い。

○　市民向けの文化芸術事業への参加状況では、「すべてに参加したことがない」は 73.9%であり、3/4 の市民が参加をしたことがない。参加した内容では「高砂市美術展」が最も多い。なお参加したことがない理由で最も多い回答は「十分な情報がない」で 29.6%を占めた。「時間的余裕がない」の 20.8%を上回っており、情報の発信力不足は大きな課題といえる。

○　市民の文化意識を高め、市民、団体の文化活動を活発化させるために必要なこと、では、「文化芸術活動に関する情報発信」が 21.6%、「文化芸術関係のイベントの開催や参加」は 16.4%、「子どもへの教育や市民への啓発活動」は 15.8%、「観光や商品開発など産業との連携」は 13.2%である。平成 27 年度と同様、情報発信の重要性が示された。

○　自ら出演や創作・習い事をする、または文化芸術活動の支援をする人では、「文化芸術活動の練習や発表の場の提供」「文化芸術団体や支援組織への寄附や助成」を必要とする意見が多い。新型コロナウィルス感染症の拡大で活動が制約を受け、練習場所の確保や助成が必要となっている。

○　「高砂市文化振興基本計画」についての自由記述意見では、「情報発信や PR の必要性」が 54 件中、18 件を占めた。「若者含め、全ての高砂市民向けに文化情報を発信してほしい」や「情報源がほとんどスマートフォンであることに対応することが必要」といった意見である。

○　他にも「高砂市の文化政策への提言」や批判的な「文化振興政策や施策の課題提起」はそれぞれ 16 件、9 件を占めた。「高砂市ならではのイベント」「観光資源を活かした文化と融合」「産業振興とドッキングした高砂市らしい企画」など高砂市の特性を生かす事業の提案と「文化会館は不要」「基本方針が多岐にわたりすぎ」などがある。

【高砂市の文化施設について】

○　余暇を充実させるために必要な施設では、「商業施設」「温泉・温浴施設」「スポーツ施設」が上位を占め、余暇を文化芸術活動より買い物や寛ぎ、運動などで過ごしたいと考えている。ただし、日常生活で文化芸術の鑑賞を重視する人ほど、「劇場・ホール」「美術館・博物館」「図書館」が必要と回答をしている。

○　文化芸術活動を発表、展示するホールや会場があることについて、「重要」は 33.9%で、「どちらかといえば重要」と併せて８割が重要と考えている。特に、文化芸術の鑑賞を重要視する回答者ほど、ホール等のあることを「重要」とする比率が高い。これは自分自身での文化活動や支援活動を重視する立場の方も同様である。

○　「文化会館」「文化保健センター」の利用の満足度は、利用者を分母とする場合、「満足」は12.2%、「やや満足」は20.9%、「普通」は58.6%、「やや不満」は5.4%、「不満」は2.9%で、満足度は高いと判断することができる。ただし日常的に文化芸術を鑑賞することや、自分自身での文化芸術活動を重視する回答者ほど、厳しい見方をしている。

○　不満の理由であるが、44 件中、11 件が「施設内の雰囲気がよくない」、10 件が「音響・設備等が十分ではない」、9 件が「駐車場が少ない」と、施設や設備面の理由が多く、解消には建て替えを含む施設の全面的な改修が必要である。

○　過去 3 年間での、主催者・出演者として市内のホールの利用状況は、「0回」が 85.3%で、多くの市民が主催者や出演者として利用したことはない。「1～5 回」は 13.4%である。性別では「女性」が、また年齢が高い程、利用をしている。また自らが創作や出演をする方の半数以上は 1 回以上、利用している。その内容としては「音楽」が一番多い。

○　会場として利用した理由は、「駐車場が確保できる」が最も多く、次いで「会場の立地がいい」「客席数が催し物に適切」となっている。また利用した方からは、休憩室の充実や WiFi 設備、バリアフリーの整備などが必要との意見を得ている。

○　過去 3 年間での、来場者・参加者としての市内のホールの利用状況は、「0回」が 63.8%で、2/3 の市民が来場をしていない。新型コロナウィルス感染症の拡大により来場が大幅に減少したことも考えられる。「1～5 回」は 33.2%である。性別、年齢階級別では来場の状況に差はない。文化芸術を鑑賞することや、自分自身での文化活動を重視する方は来場、参加した回数は多くなる。

○　「文化会館」「文化保健センター」のホールで「特に困ったことはない」が 44.4%と半数近くを占めるが、「駐車場が少ない」19.4%、「客席の前後や通路が狭い」9.3%、「ロビーやホワイエが狭い」8.3%と「狭い」ことの問題の指摘があり、解消には建て替えなど大規模な改修が必要となる。

○　過去3年間で、高砂市以外にあるホールへ出かけた回数は「0 回」が 56.3%と過半数である。「1～5 回」は 36.3%、「6～9 回」は 5.5%、「10 回以上」は 1.8%で、市内のホールよりも市外へ出かける回数の方が多い。もちろん、市内のホールを利用しない方は、市外のホールにも鑑賞等に出かける訳ではない。

○ 「文化会館」「文化保健センター」を利用しやすくなるサービス（複数回答）では、「催し物の情報提供やPR」35.7%、「予約状況などの情報の公開」15.9%、「ポスターやチラシの設置」14.3%、「インターネットでの申請手続き等」14.0%と、情報の提供や PR など発信力を望む内容である。特に若年者ではインターネットでの申請や予約情報の提供を望む割合が高い。

○ 市内の文化施設への自由記述意見は 64 件あり、「新規施設の整備や充実への期待」は 11 件で、「市立の美術館や博物館があったらもっといい」「市民が自由に楽しく参加できる施設にしてほしい」などがあった。一方、「文化施設整備への批判」も 10 件あり、「建物をリフォームするなり補強するなりして使う事を考えないといけない」「文化施設の建替えに、税金を使わないでほしい」など建設への税金投入を批判する内容が多い。

○ 文化施設を建替える場合の立地場所として「公共交通機関で行きやすい場所」が 37.9%、「自家用車で行きやすい場所」が 27.3%と、利便性の高い場所への期待があるが、公共交通と自家用車利用と動機が異なっている。また街中を希望する意見と、緑に恵まれた場所への立地を望む意見も多く、文化施設について市民は異なるイメージを有する。年齢階級別では、特に若年者は都市的な文化施設のイメージを有していると思われる。

○ 文化施設を建替える場合の新施設に期待する役割は、「観る楽しみの提供」が 39.4%、「多様なジャンルへの対応」が 23.5%、「質の高い文化芸術の機会」が 13.1%で、幅広く鑑賞の機会を増やし、質の高さも重要とされる。「市民の交流」が 8.1%で、文化芸術以外の役割も期待されるが、施設を活用して文化振興を図ることに理解は得られていない。優れた文化芸術の鑑賞や自分自身で文化芸術に関わることを重視する層では、質の高い文化芸術に接する機会に期待をしている。

○ 文化施設を建替える場合のホールの理想の規模について、大ホール（現行は「文化会館じょうとんばホール」1,066 席）については、「900～1,199 席」が 47.0%、「600～899 席」が 30.1%、「1,200 席以上」が 14.2%、「300～599 席」が 8.7%である。現状維持との意見が半数を占める一方、縮小方向の意見が、拡大よりも上回っている。

○ 中ホール（現行は「文化保健センターぼっくりんホール」286 席）については、「200～299 席」が 56.9%、「150～199 席」が 18.3%、「300～399 席」が 18.5%となり、150～400 席の範囲で 93.7%を占める。

○ 文化施設を建替える場合、ホールに併設して欲しい施設については、「市役所の出張所」「ショップ」「レストラン・カフェ」の利便施設で 49.0%を占める。貸館機能である「会議室」「多目的フリースペース」は 27.6%である。文化芸術に関わる「小ホール」「練習室」「展示室・ギャラリー」は 22.8%で、文化芸術活動に特化するものよりも、利便性が高く、人の集まる複合的な施設を想定していると思われる。

○ ホールに併設する施設として「小ホール」を挙げた回答者からの 10 件の回答によると規模は「50 席～100 席未満」が最も多い、また小ホールは自由に席がレイアウトでき、小さなコンサート用として舞台・観客一体型のようなイメージがある。「練習室」を挙げた回答者によると、「音楽の練習」の期待が 6 割を占めている。